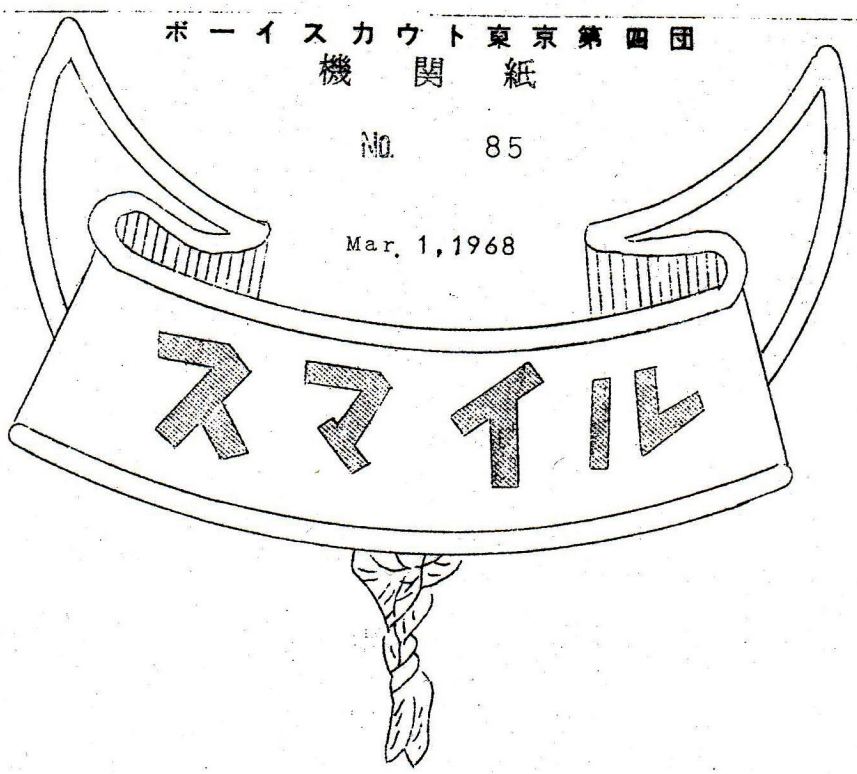
ボーイスカウト東京第四団
機関紙
No. 85
Mar. 1, 1968



副団委員長　美藤　章

昨年の四月二十九日には、霊南坂教会のスカウト、東京才四団は二十周年を迎えてみんなでお祝いしました。それは、単なるお祭り気分で、楽しく賑やかにお誕生日会をもつことだけではありませんでした。私たちがスカウト活動二十年の歩みをしつかりと反省し、その歩みの中に培かわれているものを十分に把握すると共に、これから何がほんとうの課題になるのか、真剣に考えなくてはならないことでもありました。

あれから、既に一年を経ています。様々な行事を消化し、あらゆる意味で一年間の決算をしなくてはなりません。一年一年の年度の終結と開始は、いつも、スカウト運動の反省と課題をしっかりと認識していかなくてはなりません。時間的には、土曜日の午後のほんの数時間、本当に子供達の為に賭けているのか、リーダー達が対話を深め、適確な問題提起をなしつつ、総合の意識が一つにされているのか、リーダー一人一人が真剣に反省し、新しい意欲をもたねばなりません。或いは、チャーチ・スカウトとしての正しい位置付け、正しい理解が検討されているのか、しっかりと取組み、克服していかなくてはならない問題が多くあります。

私たちが様々な問題に直面するとき、それらの問題を決してあいまいにしたり、弱腰になったりするのではなく、真剣に問題を受けとめ、論じ、追求して、少しでも前進していこうとする不屈の闘志を常に持ちたいものです。その闘志がスカウトの本当の精神であると共に、一年一年重ねられていく歩みの年輪をしっかりとしたものにしていくし、段々と大きく、強く成長していく力であることを信じています。お互いが手を握り合って頑張りましょう。

（霊南教会伝道師）

年長隊　小　松　正太郎

それは、生きているはりあい。生きているしあわせや意義を感じることである。だから、人それぞれ生甲斐を感じるものはとうぜんちがってくると思う。また、その人の年令やその人がおかれた環境によっても生甲斐を感じるものはかわってくると思う。しかし、どんな年令でもどんな環境にいても、生甲斐を感じるものがたくさんあればあるほど生活は楽しくなるだろう。また、逆に、生甲斐を感じるものがない生活ほど単調でつまらない生活はないだろう。そして、その人の生甲斐は何かを調べることによって、その人がおかれた環境や、その人の性格を判断することができると思う。

さて次に、僕が現在生甲斐を感じているものについて書きたいと思う。

現在僕が生甲斐を感じているものは、まず第一番目に「勉強をしているとき」と書きたいところだが、現在のところあまり生甲斐らしきものは感じていない。しかし、学生である以上は、とうぜん勉強をしているときが一番にありがたいところであるが現在は三番目ぐらいである。

いま一番生甲斐を感じることは、やはりハイキングやキャンプに行っているときである。目的地をめざしてただ一目散に歩いているときなどとくに感じる。二番目はラジオやエレクトロニクスなどの電気工作をやっているときである。次に三番目は、前に書いたとおり勉強をしているときである。四番目は、食べているときである。現在の僕が感じるのはこの四つぐらいである。

これからは何か一つの楽器を選んで、その楽器を演奏することに生甲斐を感じられるような楽器をみつけたいと思っている。

考えよう
「生甲斐」

青年隊　内　藤　正　樹

現在、生甲斐はなんですか。と質問されて、すぐに答えられる学生が何人いるかわからないけれど僕は少くとも、すぐには答えられない。果して学生生活中に生甲斐などというものを持つことが出来るのだろうか。一人前の社会人になって、自分自身を養っていく立場の人であるならばそれそうとうの生甲斐を持たずに生きることは、不幸この上ない人である。

学生生活中、一番大事なことはなんだろう。これは人、一人一人異なっているだろうが、実際問題としては学問を吸収する場として、生きていくのが真の意味ではないのだろうか。しかし、学生という地位に現在入っている僕にとって、学問に生甲斐を感じなければならないのかもしれないが、学ぶということは、自分の将来のためにやらなければならない自己に対する義務であり、生甲斐というかたちでは表われてこない。もっと深く考えて、その義務を果すことに生甲斐を感じても良いのだろうが、僕はそうは感じない。

学生時代における社会的特権は、学びたいと思う方面に向って一生懸命努力することが自分の将来のためにやらなければならない義務を完了させるのである。ただそれだけといったら語弊があるかもしれないが、最低それをやったならば学生生活を悔なく過せたといえるだろう。その点が社会人と学生とを比べたときに表われてくる有利な面である。だから最低限学生としてしなければならないことをやっていれば生甲斐はなにであると言ってその生甲斐に縛られなくてもいいのではないだろうか。学生時代は、身心共に発達する時期でもあるし、また、あらゆるものを欲しがる時期でもある

と思う。

そこで僕としては、スカウティングを学生生活の中に導入して身心共にスカウティングを通し、将来のある目的に向かって自分を磨きあげて行くことを、学ぶ時間以外の余暇時間にしなければならない義務として行なっている。それが僕の生活方針だ。

僕は今。。。。

青年隊　安藤　徹

ローバーに入隊して五か月、毎週土曜日に集会を持ち開会式、閉会式を行うことは有意義な事である。毎日の生活を引き締める為にも大変役に立つ。しかし現在のところ、なんの目的もなく仕事がない現在、土曜日の集会が無意味なものに思われてならない。

ローバーはいかにあるべきか、何を期待したら良いのか。又ローバーの本来の目的は何か。このような事が頭に浮んでくる。ただ、だらだらと土曜日の集会を、ぜっこうの遊び場にしてはならないと思いつつ現在の、僕は家から出る理由にしているような気がする。

普通のスカウト達は少年隊で野営などの厳しい訓練を通してスカウティングの全てを身体で憶えて、ローバー隊に入隊して社会人としての自覚の中で有志者だけで物事を計画、実行して人間性を養ないつつ奉仕の精神をやしなっていくのだろう。しかし僕にはその期間はなかった。少年時代のつみかさねがないのである。現在そのクラフト的な技能を身につけている最中であり、今度のキャンプで総仕上げである。その点で少年隊を通らず急にローバー隊員になることにも多少の疑問はあるが、入隊した以上はやく正ローバーになり活躍をしたい。もちろん社会人としての自覚をもって人間性を高めるために、目的を見つけ出し自分自身を磨いていきたい。自分自身を磨くということは一つの社会への奉仕だと思う。

僕にはローバーへのもう一つの望みがある。それは大学では養えないものがローバーにはきっとあるはずである。それが何だか現在の僕にはわからないが、きっとある。きっと見つけ出し自分の物にしてみせる。

これらの事を考えていく内に、ローバーの有意義さが多少わかって来た。これからのローバー生活できっとはっきりした意義をこの手で見つけ出したい。

『詩』に思う

年長隊副長　百塚健一

三月も半ばを過ぎる頃、新らしくボーイスカウトからシニアスカウトへと進入してきた隊員達も、集会へそろそろ出て先輩達と一諸に、スカウティングに、励もうと、またシニアというものをより早く知ろうと思っていることと思います。

また現在シニア隊で活躍している隊員達も新らしい隊員を迎えるにあたって、昨年のいろいろな想い出や反省を心に秘めて、新入隊員の指導にあたろうと思っていることと思います。私達シニア隊のリーダーとしても同じことです。

ところで私達の団は知っての通りクリスチャンスカウトとして他団にもよく知られています。そこで私達はクリスチャンスカウトとしての自覚と誇りとを持ってスカウティングに私生活に励んでほしいと思っています。

クリスチャンスカウトと一口に言ってもよくわからないと思います。そこで私はある人からもらった詩集をいくつか書き出してみようと思います。この本は八木重吉という人が書いた信仰詩集の「貧しき信徒」という本です。

おおぞらの　こころ

わたしよ　わたしよ
白鳥となり
らんらんと　透きとおって
おおぞらを　かけり
おおぞらの
うるわしい　こころにながれよう

森へはいりこむと

森へはいりこむと
いまさらながら
ものというものが
みいんな
そらをさし
そらをさしているのにはおどろいた

ずいぶん

ずいぶん
ひろいのはらだ
いっぽんのみちを
むしょうにあるいてゆくと
こころが
うつくしくなって
ひとりごとをいうのがうれしくなる

私はこの詩を読んでいろいろなことを感じ取りました。この詩を読んだ人はきっとなにかを感じ取ることが出来るでしょう。また、ただ感じたというだけではいけない。

大阪牧方二団紹介

カブ隊々長　大島啓義

去年の九月に一か月半程、仕事で大阪の牧方に滞在していた時、ボーイスカウト牧方二団を訪問しました。この団には、カブ、ボーイ、シニアあわせて約百二十名程のスカウトがいました。私が訪問した時には集会はピクニックで、団委員長と話をしてきましたが、現在牧方二団はスカウト数が多い上にリーダーが少なく設備が不十分なのが大きな問題だということでした。が、そこで興味深い事がいくつかありました。まず、この団はお寺が育成団体で集会場所、スカウトハウス等の設備がなく、お寺の境内の隅にスカウト達が各々分担を決めブロック造りの部屋を造っていたこと、又各隊、団内の事務処理が非常に整然としており、その方法も、誰が見ても各隊の様子が一目でわかるようになっていました。

この団は田舎にある一団にすぎませんでしたが、私達、東京の真中にあって、設備もありかなり恵まれた中にありますが、自主性とか創造性というものについて、もっと考えねばならない点が多くあるように思われました。

感雑　父兄

スカウトと学生運動

年長隊父兄　今　井　条

「ぼくは学生運動をやっていません。でも東京でテレビを見ながら、はげしいショックを受けました。ぼくは三派でも民青でもない。ハンパな学生だと自潮していました。帰郷して両親に会ったら、学生として参加しなかったぼくの行動を是認しながらも、たよりないような顔をしていました。」或佐世保出身の学生が、春休みに帰郷してこう語ったと、ある人が新聞にかいておられた。私が　此頃考えているのは、この学生が語っている事そのままである。学生の目に映った親の態度もまた、まことにそうだと思われる。此の頃の学生運動のあり方をみているとどうにもやりきれない。私は決して学生運動を否定しているものではない。むしろ、考えない学生など我慢が出来ないから、当然あるべきものと思うし、発展してほしいもの…と思っている。それにつけても、私共の四団でも、この年令の若い人々が、シニアにローバーに所属して、スカウト運動をやっているのだが、一体、スカウトの諸君は、現代の時流、それに伴って生じる学生運動のあり方などを、どんな風に考えているのだろう。スカウト諸君とて、かっこいいスカウト活動に終始しようとしているとは到底思われない。

現在、自分が生きている時点の問題と真剣にとりくもうとしているにちがいない。私はいつもそう思っている。羽田、佐世保から此の度の王子、成田に到る運動をみてくると、彼等が抱いていた高邁な理想はどうしてしまったのかと情なくなる。暴徒を思わせる無定見な行動をしていては、結局、自分達で自分達の理想をつんでいるようなものではあるまいか。四団のスカウト諸君も、現在に目をそむけないでとりくんで下さい。まじめに学問もして下さい。物知らずばかりの世の中になっては困ると思うのです。考えるスカウトになって、積極的にアクティビィティを推しすすめて下さい。君たちこそ、次代のにない手なのだから。

一九六八年三月

拝啓BS殿

GSリーダー　岸　田　久　代

スカウトの集りに出席すると、いつも四団は注目の的。「あゝ、四団ですか。」と皆が一目おいてくれます。それはB・Sでも同じだと思います。その時、その人達は頭の中で、「あの歴史ある、素晴しい活動をしている四団かしら。」と考え、同時に「この人はどのように四団の素晴しさを示してくれるだろう？」と期待しているに違いありません。「四団です。」という事は、だから名誉であると共に責任のある事です。四団がどこでも認められるのは、単に二十年という歴史だけではなく、私達の先輩皆が立派なスカウトであったからです。それは昨年発行の二十周年記念誌の中で今田さんの書かれた〃ハシリ〃という文の中でも理解出来ます。すべてに人々の先を努力して歩んだ伝統が次々に伝えられ、受け継がれて来たお蔭です。しかし最近、私はその良き伝統が失われつつあるように思います。伝統の上にアグラをかいて、努力することを忘れているのではないでしょうか。毎回の集会に慣れてしまわず、「初心忘るべからず。」常に新しい気持で進んでほしいと思います。十年、二十年いや百年後にも堂々と胸を張って「四団から来ました」と言えるように。

『OB訪問』

僕と魚屋とホイッスル

戸田　健次郎

三月のある土曜日の夜、外交は月曜日にまわる品物をまわる順序にカゴに入れて、一日の仕事を終ります。（十時）

いつも夜は十一時から十二時位に寝て、朝は六時半に起きます。BSのキャンプの食当より三十分多く寝ているわけです。BSのキャンプで六時に起きるくせがついていたので意外と楽です。夜は、昔、僕がカブの時にもらった年少隊機関紙〝ベアー〟の一九六六年二月十二日№18号を何度も何度も読んでいるうちに、手の油や日やけで黄色くなってきて、〝ベアー〟（熊）も僕の顔を見あきて穴があきそうです。

そんなことをしているうちに一年が経ち、クリーニングの仕事に入って、お客様から〝魚屋さん〟というあだ名をもらいました。江戸っ子みたいに声が大きいからだそうです。自分ではそんなに大きい声だとは思いません。よく考えてみると、昨年の六月頃に僕が社会人としての、一回目のスランプがやって来ました。その時はたしかどこかへ行きたいような気持だったように思います。その時、僕の机の上にあったよごれたホイッスルが耳に入りました。ホイッスルを見ているうちに、昔、僕がカブやBSの時に吹いたことを思い出してもう一度思いきり吹いてみたくなりました。しかし、僕のいる柿木坂は、住宅街で静かな場所だし、ホイッスルを吹いたら大変。そしてホイッスルを手に駒沢公園まで行き、思いきり吹きました・・・・。

なんて、気持のよかったことか。ダイヤモンドのように星が輝いて僕の心の中まですがすがしくしてくれた。明日から新しい気持で仕事ができると思うと自然にもりもりと元気が出て来ました。（ポパイがほうれん草を食べて力がわいて来たのと同じです。）

僕と〝魚屋〟とホイッスルの生活が始まった。いつもネズミ色の事務服のポケットの中にホイッスルがあり、このホイッスルが心の支えになっています。

○戸田さんは、いわずと知れた戸田クリーニング屋さんの・・・・・。

ボーイからシニア、ローバーを経て長い間カブ、ボーイのリーダーをして下さいました。現在は柿の木坂でクリーニング業に励んでおられます。

＊＊＊無責任『十の質問』＊＊＊

○柳隊長に

好きな色は？
グリーンだな
マンガは好きですか？
（即座に）好きです
キリスト教を信じていますか？
ほぼ
愛読書は？
一杯あるネー、まじめたのは「三太郎の日記」
自分をハンサムだと思いますか？
ウフフン・・・・
もてますか？
たいして
失恋したことは？
あります
ラブレターもらったことは？
ある（ニヤニヤして）
耳をうごかせますか？
少し
現在大切なものは何ですか
ンー何だろう、良心だな

スマイル心得

一この機関紙を読む

全ての皆様へ一

一、隅から隅までズズイズイーッと読まなくてはならない

一、記事を求められたら、ニッコリ笑ってすみやかに提出しなくてはならない（拒否者は五年以下の徴役）

一、鼻をかんだり、食べたり、包みガミにしたり等、これを悪用してはならない

一、ニヤニヤしたりして読む等、誤解をまねくような読み方をしてはならない

報告

＝団会議＝一月十三日　出席者十二名

一、各隊報告

一、おもちつき反省

一、日の丸行進の意義

＝団委員会＝一月二十七日　出席者九名

一、リーダー選出に関して

一、事務組織化の確立

＝新年会＝一月二十七日　出席者三十余名、於レストラン・ウールド

リーダーの慰労と父兄の親睦のため

＝団会議＝　二月十日　出席者八名

一、各隊連絡事項

＝スカウト・サンデー＝　二月十八日

霊南坂教会がスカウトのことをおぼえて礼拝をしてくださいました。

＝二十一周年記念＝　二月二十二日

＝団委員会＝　二月二十四日　出席者十名

一、リーダー変動の件

一、会計現況報告　承認

＝団会議＝　三月九日　出席者十一名

一、連絡事項

一、バスピクニック費用に関して

一、四団リーダー講習会（四月）

行事予定

各隊三月キャンプ

少年隊（二十七日～二十九日）

外房総御宿へ舎営

年長隊　三浦半島杉田

青年隊　伊豆湯ヶ原で合宿

おめでとう

○遠山兼宏さん（OB、愛称金さん）三月二日ご結婚！　新生活へスタート。

○田中新二さん（OB）二月二十二日ご結婚。おめでとう

お帰りなさい

○萩原昌子団委員　青年の船で一月～三月まで五十日間東南アジアを回って無事帰国なさいました。

バスハイク

タイヤの空気を抜いたるぜ

病気で行かれない奴

か・い・せ・つ

もうこの辺迄読んで下さった方にはお解りのことと思いますが、今度のスマイルは今迄のスマイルとはかなり違っております。「考えよう」の欄では毎号あるテーマを設け、そのことについてスカウトがどの様に考えているかを書いていただくと共に、出来れば提出された意見に対する感想批判等を皆様に投稿していただき紙上論争などを巻きおこせればなあ等と思っております。

「OB訪問」では、まだ皆様の記憶に残っておられる方からずっといにしえのスカウト迄、四団を去られてからボーイスカウト運動をどう思っておられるか、現在の自分にそれが与えた影響、又四団の想い出等を書いていただく欄です。

毎号父兄の方にも原稿を御願いしようと思っております。今号の今井さんの御意見はスカウト諸君には少々耳の痛いところではないかと思います。

少々不謹慎（でもないですが）なものもと思い設けましたのが「十の質問」、日頃口やかましいリーダーが渋茶苦茶にいびられることになっております。どうぞ御支援御期待下さい。

「僕は今……」はスカウトが現在自分のやりたいこと、憤りを感じること、趣味等何でも書きたいことを書いていただく欄です。今回は初めてのため、こちらから指名して書いていただきましたが、これからは皆様の投稿によりやっていきたいと思いますので、ふるって原稿をお寄せ下さい。

「拝啓、BS殿」は毎号GSのリーダーの方に現在のBS全般について考えておられることを書いていただこうと思っております。壁に耳あり、夢々うかつなことをなさらぬ様に、GSから嫌われますよ。

なおPR等はもうお解りのことと思いますがみんな××ですので御注意下さい。

皆様の原稿を心からお待ちしております。

?PR?

リーダーとデンマザーのブロマイド

白黒　五〇円
カラー　一五〇円
サイン入り　二〇二円

スマイルフォト部

《編集後記》

初めて新聞等を作ることになり一体どうなるのやらとも思いましたが、美人のお姉様達に色々と御指導していただきウヒウヒであります。皆さんもスマイルの編集員になるといいですよ。（T）

新しい編集員をむかえ、ここいら辺でスマイルもマンネリを打ち破らねばと、お正月以来考え続け、とうとう桜の季節になってしまいました。三人寄れば何とやらの今月号いかがでしょう？

御意見をどしどしお聞かせ下さい。今年は一応二ケ月に一度の発行にするつもりです。「心得」をよくお読みの上、御協力下されば幸いです。（S）

スマイル

発行日　昭和四十三年三月一日
発行人　田中正男
編集人　杉原正
発行所　港区赤坂一ー一三ー六
日本ボーイスカウト東京四団